【随　筆】

初雪の便りが聞かれるようになりました

住　吉　　尚
（釧路支部）

何時ものように車で走っていました。前を行く車が急にハンドルを切って何かを避けました。するとこの車の下から見えてきたのは、何度も踏みつけられてボロボロになったタヌキの死体です。そして対向車線側の道路脇には見た目に傷がない奇麗なタヌキの死体が。こちらは秋のタヌキですから丸々と太っている上、冬毛になったばかりの大変美しい被毛が見えました。この時期に何で２頭がいっぺんに車にはねられたのでしょうか？タヌキも冬に向かってたくさんの食べ物を食べて太らなければならない時期です。それで食べ物探しに夢中だったのでしょうか？ともあれ道路は車だけが走るのではありません。たくさんの野生動物も横断していきますから、ほんの少しでもそちらにもご注意を払っていただきたいものですね。これがご自分の安全運転にも繋がるでしょうから。

さていつも釣りをする港でカレイ釣りをしていると、横に係留されていた船から出てきた若者が私に「イワシが少し余ったので要らないか？」と声をかけてきました。私は生きが良い魚なら何でも歓迎です。釣りに使う水くみバケツを持って行くと、とても入る量ではありません。クーラーボックスにも入れてもらいましたが、大きなサバも２匹混じっていました。「こんな大きなサバがいるんだ！」と言うと、「こんなもんじゃない，カツオのような大きなサバもいるのだ」、とのことでした。私は「カレイが釣れたので何匹か持って行くかい？」と言い、カレイ２匹との交換が成立しました。暴れるカレイを締め、血抜きをして渡すと、「いつもは何にして食べるの？」、「昆布で締めて刺身ですよ！」魚を獲る船に乗っている人でも魚に詳しいとは限らないようです。私的には大きなサバだけでも十分な価値があると言うものです。

おこぼれのイワシに群がるカモメ

帰ってからどんな料理にしようかな、などと考えながら走っていると、なんと道路上にエゾライチョウがのんびり歩いています。オー！こんなチャンスは初めてのことです。慌てて「カメラ、カメラ！」と叫びましたが、カメラはチョッキのポケットの中。しかもご丁寧にポケットはファスナーで閉じられています。しかもチョッキの上にジャンパーを着ていますから、簡単にカメラが出てはきません。焦るとなおさらです。やっとカメラが出てきた時にはもうエゾライチョウの姿はどこにもありません。ゆっくり観察することも、写真を撮ることもできずにがっかりして、しばらくその場から動けませんでした。私が野鳥の写真を撮るようになって15年にはなります。でも最大のチャンスを生かせませんでした。「どんな時でも素早くカメラを出せるように」と思ってはいるのですが。上手くいかないこともしばしばです。

さて家に帰って、もらった魚をどう料理するか？イワシは全て身おろしして、ネギやらショウガやらを入れ、すり身団子にして団子汁に。サバは大変生きが良いので生でもいけると思いましたが、妻が「生は嫌！」と言うのでみそ煮にしました。どちらも大変おいしく、魚の街に住む者の幸せをかみしめました。

季節は晩秋、どころかもう初冬でしょうか。つい先日まではモミジが美しかったですね。自然林のモミジはとても美しいものです。特に針広混合林では、針葉樹の濃い緑、広葉樹の明るい緑、黄色、褐色、赤、など色とりどりです。中にはすでに落葉してしまった木もあります。ただ紅葉は１週間と言わずにどんどん色が変わって行きますから、これも面白いものです。中にはハンノキのように紅葉せずに葉が落ちていく木もあります。紅葉は木が葉の中にある葉緑素から窒素化合物を回収するために緑色が失われることから起きる現象です。窒素化合物は葉緑素を作るためにはどうしても必要なものです。そのため、植物を育てる際には窒素肥料が最も大事な肥料となっているのです。この窒素化合物を無駄にしないように、葉が落ちる前に回収して来年使うのです。でもハンノキは根粒菌によって窒素化合物が作られるので、葉か

ら窒素分を回収する必要がないからでしょう、緑のまま落葉していきます。黄色い色素は葉の中に元々あると言いますが、何で黄色い色素が葉の中にあるのか？詳しい人に聞いてみました。これは葉緑素が入った葉緑体と言う縦長の立体組織が、太陽光線の中で光合成に必要な波長以外の光には大変弱いので、黄色い色素で葉緑体を保護しているのだと言うことでした。赤い色素は葉に残った栄養分が変化したものだそうですが、木が意図したものなのか偶然なのかは分かっていないようです。

ナナカマドは平年作でしょうか

真赤なモミジです

ところで、テレビを見ていて驚きました。本州のショッピングセンターの中にクマが入り込んだので、避難騒ぎがあったそうです。でもこれは北海道のヒグマ騒ぎとは少し違いますね。何となくですが、命にかかわると言う緊張感があまり感じられませんでした。やはりツキノワグマはヒグマに比べると、猛獣と言う危険度に大きな違いがあると言うことでしょう。何人もの人がクマに襲われケガをしたとか、民家の庭に入り込んだとかと言うニュースは切れ目がありません。場所は秋田県、山形県、新潟県、石川県、富山県など日本海側の東北から北陸に広く見られるようです。これは山に杉ばかり植えたために山奥に餌がなくなり、人里近くに実のなる木が多くなってしまったためでしょう。北海道でも未だに植林と言えばカラマツとトドマツばかりです。これが山から人里にクマを呼ぶ原因の一つになっているのではないかと私は思っています。ヤマブドウなどのつる植物は道路脇にたくさん見られますね。でも山に入ると意外なほど実のなる木は少ないものです。道東ではドングリがなる木はミズナラですが、これも二次林に多く、長期間木が切られていない森ではあまり多くはありません。今年は北海道全体でドングリなどの野生の木の実が不作だとか。でも10月も半ばを過ぎると、北海道では人家近くにクマが近づくことが少なくなります。家庭菜園などにあったクマが食べたがるものがなくなるためでしょう。クマが民家に近づくのは、そこにクマが喜ぶ食べ物があるからなのです。知床にはクマを叱りつける猛者がいると言います。この人の話を聞いてなるほどと思いましたが、彼らはクマが食べられるものを絶対放置しないと言います。生活圏がオーバーラップしているので、人の活動圏にしばしばクマが出て来ると言うだけのことで、互いに何の利害関係もないと言うことが、クマと人が共存できる最大の理由でしょう。そうは言ってもすごいですね。本州のツキノワグマ騒ぎでも、今年は山に木の実が少ないと言う報道を見ました。何か事件があると「これが原因だ！」と決めつけがちですが、原因は一つだけではないでしょう。私がクマ現役だった頃には「ヒグマは山のなり物が少ない年は冬眠できない個体が現れるが、ツキノワグマはどんなに山の木の実が不作の年でも、冬眠できないほど栄養状態が悪い個体が出現することはない！」と言われていましたし、最近のニュースで見るツキノワグマも太って栄養状態は良いように見えましたから、人里への出現と山の木の実の作柄には関連性がないように思いました。単に人里には美味しい食べ物があり、その割には人の気配が少ない、と言うことが大きいのでは。一方、ヒグマでは人馴れした個体が増え、人目を気にしないで民家近くに出没する個体が多くなったので、春グマ駆除を復活させるようですね。人とクマが安全に共存するためには、ある程度の駆除を行い、クマが人を恐れて人には近づかない、と言う環境ができ上がると良いのですが。思惑通りになることを願いましょう。

先日釣ってきたコマイを干し網に入れ吊るしていると、どこからか聞いたような声が。コーコーコー、空を見上げるとハクチョウの群れです。真っすぐ南へと１列になって飛んでいきます。１、２、３羽、合計20羽の群れ

です。珍しく全員が縦１列になって飛んで行きましたが、真っすぐ縦１列になっての編隊飛行は初めて見ました。

オオハクチョウの家族

コマイを干したと言うことは、コマイ釣りに行ったのですかって？飯寿司を漬けるためにカレイとチカを釣りに行きました。チカは良く釣れたのですが、寒くなってきたからでしょうか、カレイは釣れず、コマイばかりだったのです。コマイは針掛かりすると外しても死んでしまいますから、生きたままでの放流が難しい魚です。仕方なくキープして干して見ました。釣ってきたコマイをすぐに干すと、市販のコマイの干物と違って匂いが全くありません。大変美味いのですが、市販の匂いのあるコマイを食慣れた人には少し物足りないかもしれませんね。とは言え、これで何とか飯寿司用の魚は確保できました。これでやっと周りの景色を眺める余裕ができたと言うものです。

先日美しい黄色、まるで黄金の木の葉か？と言わんばかりのポプラの葉を見ましたが、数日置いて見に行くとすでに落葉して木は裸になっていました。森の木の葉も、

黄金色のポプラ

「ワー奇麗」と思ったら、数日で枯れ木になっていると言うほどこの時期の変化は速いものですね。ミズナラは黄色から濃い褐色に、ヤチダモやカツラはずいぶん前に裸になっています。カツラの落ち葉は甘い独特の香りがあり良いものです。でもこの匂いは葉が落ちると翌日には匂いがしなくなりますから、皆さんに「香りを嗅いで！」とは言いにくいと言う欠点がありますね。

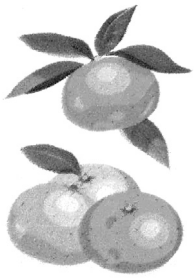
今日は港のマリントポスにある食堂で昼をいただきました。生きのよいイワシは大変美味しいものですね。でもこの日は、もうあのイワシの巻き網船団は１隻も見当たりませんでしたから、イワシ漁はすでに終わったのでしょう。聞くところによればイワシ漁は10月いっぱいで終了とか。港では数人の釣り人が竿を出していました。小型のニシンとサバが釣れていました。天気が良いのでのんびり魚と遊ぶのには良い獲物のように見えました。私のように「飯寿司、飯寿司」と念仏のように唱えながら真剣に釣るのは、心に余裕がなく、他人にはあまりお勧めできませんね。でも私もこの後はのんびり遊び心で釣りができそうです。と言いましたが、もうすぐ飯寿司の漬け込み作業が待っています。夫婦２人共に歳をとったので、昨年から１樽だけにしていますが、これは私ども夫婦にとっては一大イベントです。無事に漬け込みが終わることができれば、共に健康体と言うことの証でしょう。何とか高齢者運転講習を修了し、無事運転免許も更新することができました。無事故であるよう日々安全運転に努めると自分に言い聞かせながら今日も走っています。

〈句題〉　冬至

「冬至くる
暑い寒いの今年また」

「コロナ禍や
行事なきまま
冬至くる」

「明日からは
日はまた戻る
冬至かゆ」



（室蘭市　白波瀬　稔歳）